

## 一般演題（口演）

■ 2025年11月15日(土) 9:20 ~ 10:10 ■ 第5会場

## [O14] 一般演題（口演） 14 転移・再発1

座長：川原 聖佳子(長岡中央総合病院消化器病センター外科), 原 聖佳(春日部市立医療センター外科)

### [O14-3] 大腸癌大動脈周囲リンパ節転移の切除適応の最適化を目指して

北原 拓哉, 大内 晶, 小森 康司, 木下 敬史, 佐藤 雄介, 安岡 宏展, 安藤 秀一郎 (愛知県がんセンター消化器外科部)

**【背景】**大腸癌大動脈周囲リンパ節転移（PALNM）に対する外科切除は一定の治療効果をもたらす一方、切除後の転帰が不良な患者も少なくない。

**【目的】**大腸癌PALNMに対する外科切除後の予後因子を検討する。

**【対象および方法】**2006年から2024年に当院で大腸癌孤立性（他遠隔転移を有さない）PALNMに対して外科切除を施行した患者を対象とし、OS・RFS・リンパ節再発の予後因子を検討した。

**【結果】**対象患者は36例で、年齢中央値は63歳、男性が18例(50.0%)。時制は同時性/異時性が18/18例、深達度はcT1-3/cT4が20/16例。臨床的(c)PALNM個数は1個/2個/3個以上が11/7/17例。cPALNM径は10mm未満/10-15mm/15mm以上が5/20/10例であった。術前化学療法を15例(41.7%)、術後化学療法を29例(80.1%)に施行した。対象の5年OSは57.9%，5年RFSは39.4%，5年リンパ節再発率は47.1%であった。OSの単変量解析では3個以上 (HR (95%CI) 4.27 (1.16-15.82), P=0.03)、同時性転移 (HR (95%CI) 3.32(1.01-10.88), P=0.047) が有意に予後不良であった。RFSでは15mm未満 (HR (95%CI) 4.02(1.16-13.89), P=0.029) が有意に予後不良で、リンパ節再発ではcT1-3 (HR (95%CI) 3.70(1.02-13.33), P=0.046) が有意に予後不良であった。

**【考察】**PALNM切除の治療成績は未だ不良である。特に小リンパ節が多発する症例において、集学的治療による治療成績の向上が望まれる。